

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 精神保健福祉士の役割に関する次の記述のうち、正しいものを 1つ選びなさい。

- 1 精神保健福祉士法に規定されている役割は、相談・助言・指導の 3つである。
- 2 医療機関等におけるチームの一員として医師の指示のもと、治療中の精神障害者に対する相談支援を行う。
- 3 エコロジカル視点では、精神障害者を環境の中の人ととらえ、人と環境の交互作用の接点に介入する。
- 4 精神保健福祉士法の改正によって、相談援助の業務が地域相談支援に集約されることとなった。
- 5 長期在院の統合失調症患者の社会復帰(地域移行支援)を担うことが役割であったが、現在は躁うつ病やうつ病患者の復職支援に変化した。

問題 22 國際ソーシャルワーカー連盟(I F S W)のソーシャルワークの定義(2000年)に関する次の記述のうち、正しいものを 1つ選びなさい。

- 1 「定義」において、人権と人間の福利(ウェルビーイング)がソーシャルワークの拠り所とする基盤であると記されている。
- 2 「解説」において、ソーシャルワーカーは、個人、家族、コミュニティの人びとの生活を変革するために、人々の良きパートナーであると記されている。
- 3 「価値」において、ソーシャルワークは博愛主義と社会改良主義の理想から生まれたと記されている。
- 4 「理論」において、長きにわたる多くの先人たちの経験に基づく知識体系にその方法論の基礎を置くと記されている。
- 5 「実践」において、ソーシャルワーク実践の優先順位は、文化的、歴史的および社会経済的条件によって相違が認められることが記されている。

問題 23 精神保健福祉士国家資格成立に至るまでの精神科ソーシャルワーカーの歴史に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 1948(昭和 23)年に、精神科ソーシャルワーカーの前身である社会事業婦が、都立松沢病院に初めて配置された。
- 2 1964(昭和 39)年に、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会が設立された際、構成員の所属先は、3分の1が医療機関であった。
- 3 1965(昭和 40)年の精神衛生法の一部改正で規定された精神衛生相談員に、任用対象者として、大学で社会福祉に関する科目を修め卒業した者が含まれられた。
- 4 1973(昭和 48)年に提起された「Y問題」を契機に議論が重ねられ、「精神障害者の全人的復権」が日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会の目的に位置づけられた。
- 5 1983(昭和 58)年の宇都宮病院事件を契機に、精神保健福祉士法が制定され、精神科ソーシャルワーカーが国家資格化された。

問題 24 事例を読んで、地域活動支援センターで働くB精神保健福祉士の対応に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

〔事例〕

Aさん(32歳、男性)は、退院後、すぐにアルバイトに出て、無理をしては体調を崩し、同居している両親に当たるなどを繰り返していた。今は地域活動支援センターⅢ型に通っているが、朝起きるのが苦手で、いつも昼過ぎに来所している。ある日、急に「一般企業で働きたい」とB精神保健福祉士に相談があった。

- 1 いつも退院直後の仕事で体調を崩しているので、「主治医の先生は、どう思われるかしら」と話した。
- 2 仕事をするには、朝、出勤できることが前提となるので、「生活のリズムが整わないと、朝がきついのではないかしら」と話した。
- 3 Aさんの気持ちや希望などを確認するために、「なぜ、一般企業で働きたいと思ったの」「どういう仕事がしたいのかしら」と尋ねた。
- 4 本人の希望を支えることが大事なので、「ハローワークには、障害者支援の専門家がいるので、すぐに連絡してみましょうか」と話した。
- 5 Aさんが体調を崩したら家族に負担がかかるため、「ご家族の意向を確認したいので、連絡を取ってもいいかしら」と尋ねた。

問題 25 ノーマライゼーションに関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 デンマークで1950年代に設立された知的障害者本人の会であるピープルファーストの運動に端を発し、スウェーデン、アメリカ、カナダで発展した。
- 2 ノーマライゼーションの理念に基づき、1960年代から1970年代にかけて日本をはじめとした先進諸国では、急速に脱施設化の政策が進められた。
- 3 障害者が、障害のない人と変わらない普通の生活を送ることができるように、障害者を訓練し、社会に適応させていくことの重要性を唱えた理念である。
- 4 ノーマライゼーションの目的は、障害者を収容してきた施設を解体することである。
- 5 ニイリエ(Nirje, B.)は、「知的障害者の日常生活ができるだけ社会の主流となっている規範や形態に近づけるようにすること」とし、「8つの原理」を定めた。

問題 26 Cさん(53歳、男性)は学生時代から入退院を繰り返し、今回の入院も10年にわたっていたが、ようやく退院することになった。Cさんは身寄りもなく、親の遺産があったがそれも尽きようとしており、障害基礎年金が唯一の収入になる。退院後の住まいとしては、担当のD精神保健福祉士の支援を受けてグループホームの入居を申し込んだ。就労経験はないがいざれば働きたいという。高血圧と糖尿病の持病がある、セルフケアが心もとない。そこで、D精神保健福祉士はCさんの退院後の地域生活を支えるために、様々な機関との間で支援ネットワークを構築しておく必要性を感じた。

次のうち、この場合、退院後の生活に向けたケア会議への出席を求める行政機関の職員として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 福祉事務所の生活保護を担当する現業員
- 2 障害者虐待防止センターの担当者
- 3 保健センターの保健師
- 4 精神保健福祉センターの精神保健福祉相談員
- 5 ハローワークの精神障害者雇用トータルソポーター

問題 27 権利擁護に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 セルフアドボカシーとは、支援者が中立性を保ち、人道主義に基づき社会的犠牲者の擁護者となることをいう。
- 2 「精神障害者の生活は、その属する社会によって継続的に抑圧されており、また彼らを援助する専門家の行為によって抑圧がさらに助長されることが多い」と批判したのは、ラップ(Rapp, C.)である。
- 3 エンパワメントアプローチを提唱したのは、ソロモン(Solomon, B.)であり、カナダで重要な技法として発展した。
- 4 「私たちは『障害者』である前に人間だ」という主張はアメリカから始まったIL運動(自立生活運動)でのスローガンである。
- 5 パーソナルアドボカシーでは、発見機能、調整機能、変革機能、対決機能よりも、弁護及び代弁機能に特化して実践される。

問題 28 日本精神保健福祉士協会倫理綱領の「4つの倫理原則」に関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 「クライエントに対する責務」として、「職務の遂行にあたり、クライエントの利益を最優先し、自己の利益のためにその地位を利用してはならない」と定めている。
- 2 「クライエントに対する責務」として、「クライエントの自己決定を尊重し、その自己実現に向けて援助する」と定めている。
- 3 「専門職としての責務」として、「所属機関がクライエントの社会的復権を目指した理念・目的に添って業務が遂行できるように努める」と定めている。
- 4 「機関に対する責務」として、「他職種・他機関の専門性と価値を尊重し、連携・協働する」と定めている。
- 5 「社会に対する責務」として、「人々の多様な価値を尊重し、福祉と平和のために、社会的・政治的・文化的活動を通じ社会に貢献する」と定めている。

問題 29 精神保健福祉活動における多職種連携に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 マルチディシプリナリ・モデルは、チームを構成する専門職の間に階層関係があり、各専門職のチーム内での役割は固定的であり、相互作用性も小さいところに特徴がある。
- 2 インターディシプリナリ・モデルは、役割固定性がいっそう低く、各専門職の役割代替が容認され、意図的に役割解放が行われる。
- 3 トランスディシプリナリ・モデルは、メンバー間の階層性や役割の解放性がなく、機関間の相互作用性が大きくなるという特徴がある。
- 4 包括型地域生活支援プログラム(ＡＣＴ)においては、危機的状況に介入することが多いため、医師の役割が優先される。
- 5 多職種チームにおけるメンテナンス機能とは、チームの目的達成の課題を遂行していくことである。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題1)

次の事例を読んで、問題30から問題32までについて答えなさい。

[事例]

Eさん(52歳、男性)は、地域活動支援センターI型で働くピアスタッフである。

先日は、利用者のFさん(45歳、男性)から相談を受けた。

Fさんは、大学2年生(20歳)のころから周りの人が自分のこと ^{うわざ} 噂していると感じ、家にひきこもるようになった。大学3年の春に、心配してアパートを訪ねた母親と地元の精神科病院を受診し、そのまま1年の入院となった。その後、定職に就いたことのないFさんには収入がなく、両親の老齢年金に頼る生活がとてもつらいと述べた。Fさんは、Eさんと同じく、大学時代、国民年金には加入していなかったという。Eさんは、自分が利用している制度が使えるのではないかと思い、この制度についての説明を行った。(問題30)

後日、Eさんは、Fさんの話を通して、当時の活動を改めて思い出した。年金不支給決定の取消しと国家賠償を求め、全国の地方裁判所で提訴された「学生無年金問題」である。この訴訟には、地元P市の精神障害当事者、家族、弁護士、精神保健福祉士などが協力して活動していた。また、地域で働いているG精神保健福祉士は、初診日による認定の問題点などについて意見書をまとめ、裁判では証人として意見陳述も行っていた。当時、作業所で働いていたEさんは、「P市無年金障害者をなくす会」を紹介され、このG精神保健福祉士と出会った。

EさんやG精神保健福祉士たちは、精神障害当事者、家族とともに、無年金障害者に対する実態調査、署名活動などにかかわった。(問題31)

その後、G精神保健福祉士からの紹介により、Eさんは仲間を支援する現在の職に就いた。同僚のピアスタッフのように、自身の体験をいかして、今後は精神保健福祉士の資格取得を目指すことを希望している。(問題32)

問題 30 次のうち、Eさんが説明をした制度として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 心身障害者扶養保険共済制度
- 2 学生納付特例制度
- 3 特別障害者手当制度
- 4 特別障害給付金制度
- 5 障害年金制度

問題 31 次のうち、EさんやG精神保健福祉士たちが取り組んだアドボカシーとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 クラスアドボカシー
- 2 ケースアドボカシー
- 3 パーソナルアドボカシー
- 4 セルフアドボカシー
- 5 シチズンアドボカシー

問題 32 次のうち、G精神保健福祉士がEさんらとともにやってきた精神保健福祉相談援助として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ソーシャルインクルージョン
- 2 ソーシャルアドミニストレーション
- 3 コンサルテーション
- 4 アファーマティブアクション
- 5 ソーシャルアクション

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

[事例]

Hさん(34歳、男性)は、大学3年生の時に、自分を責める正体不明の声に悩まされ、その声に反応して何回も大声を出したことでアパートの隣人から苦情が入り、Hさんが入院を拒み、父親の同意により精神科病院に入院した。(問題33)

半年後に退院したが、薬を飲むとつらいばかりで、頭もぼーっとして考えることもできない。また、正体不明の声が「薬を飲むな」と強く言うため、その後、外来受診はせず、服薬も全くしていなかった。

父親が3年前に亡くなり、今は66歳の母親と二人暮らしをしているが、Hさんは正体不明の声の命令によって食事をさせてもらえなかったり、家の中で過激な運動をさせられたりすることが本当につらくて、このままでは死んでしまうと思うようになった。

Hさんへの対応に困るようになった母親は、夫の介護相談をしていた地域包括支援センターに相談した結果、訪問をして母親だけでなくHさんにもかかわってくれる専門機関を紹介された。その機関のJ精神保健福祉士は、家庭訪問を行い母親の相談に乗る傍らHさんとかかわるチャンスを探った。(問題34)

ある時、J精神保健福祉士は、運よくHさんが好きな音楽の話をすることができた。Hさんは、J精神保健福祉士と話している時間は楽しく、ふと正体不明の声のことを漏らした時に、「それはつらいですね。どうすればいいかなあ」と否定することなく受け止めて、一緒に考えようしてくれた。これを契機に、音楽の話だけではなく、大学時代に写真コンクールで入賞したことなども話すようになった。また、少しずつではあるが、正体不明の声が言う命令の内容や自分が困っていることを話すようになった。

Hさんは、J精神保健福祉士と話をし始めて9か月ほどすると、正体不明の声の命令があまり厳しいことを言わなくなり少し楽になった。最近は、入賞経験がある写真撮影で何か役に立てることはないかと考え、写真撮影にチャレンジしたり、母親の手伝いを少しずつするようになってきた。(問題35)

問題 33 次のうち、Hさんの入院形態として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 任意入院
- 2 医療保護入院
- 3 措置入院
- 4 同意入院
- 5 応急入院

問題 34 次のうち、J精神保健福祉士が所属していると考えられる機関として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神科病院
- 2 地域包括支援センター
- 3 福祉事務所
- 4 保健所
- 5 就労継続支援事業所

問題 35 次のうち、J精神保健福祉士が活用する実践モデルとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 医学モデル
- 2 ストレンジスモデル
- 3 インテンシブ・ケア・マネジメントモデル
- 4 社会諸目標モデル
- 5 アドボカシーモデル